

この文章は著作者本人の許可を得て掲載していただきますが、著作権は著作者本人の許に存在します。**転載を禁じます。**

この文章は著作者による初出紙掲載のものへの訂正があります。

誤植等の可能性があります。研究論文等に引用される場合は、**初出紙掲載のものを参照してください。**

映画人・織田作之助の再発見

溝口健二・川島雄三・日本軽佻派

井村身恒

掲載 『堺文化会ニュース』 第一五

二号二〇〇二年一月一五日堺

の文化をそだてる市民の会発

「夫婦善哉」で有名な大阪の作家オダサクこと織田作之助が、演劇・映画・ラジオドラマでも活躍していたことはあまり知られていない。現行の全集にも収録されている戯曲や灯火官制下の大阪で笑いの灯をともした「猿飛佐助」(BK放送)の脚本はまだしも、映画シナリオは全く読むことができない。

そもそも三高時代、劇作家を志していた織田は、山本修二教授の指導でシングを研究。横光利一の純粹小説論を戯曲に応用した「純粹戯曲論」をふりかざしながら、大先輩・梶井基次郎の小説を戯曲で抜く目標を建てた。

校内の「嶽水会雑誌」に習作戯曲を発表したが、ライバルの森本薫にこきおろされる。大阪出身で、あい次いで早逝することになる森本は、やがて「華々しき一族」で文字通り

華々しくデビューし、後に織田が川島雄三と
標榜する日本軽佻派の敵「莊重派の代表とみ
なすことになる。

二十代の半ばにスタンダールの「赤と黒」
に出会った織田は小説家に転向。昭和十四年
の「俗臭」が芥川賞候補、翌年「夫婦善哉」
が文芸推薦作品になり、一躍作家の仲間入り
をしたものの「青春の逆説」が発禁処分を食
らい、戦時下での口すぎは楽ではなかった。

そんな矢先、藤澤桓夫が助け舟を出す。新
聞連載の「新雪」が大映で映画化、大ヒット
の二匹目のドジョウを藤澤に松竹が打診。多
忙な彼は「代わりに有望な後輩の織田君」を
松竹に紹介……。口八丁手八丁の織田がアツと
いう間に企画を決めて来たので「織田君らし
い」と藤澤は回想している。

映画人オダサクの誕生！　しかしこの重大
な事実が従来の年譜・伝記類にはほとんど触
れられていない。私自身、三年前、織田の親
友で詩人・映画美学者の杉山平一氏に質問を

ぶつけるまで知らなかった。

「探してみたら出て来ました」と杉山氏から届いた小包を開けると、昭和十九年二月の消印のある古い封筒は当時芦屋在住の杉山氏宛。裏返すと「松竹大船撮影所 川島雄三」の署名。震える手で中身を見ると「四つの都」の生シナリオだった。新開連載の「清楚」と「木の都」を下敷きに織田自身がシナリオを書下し、川島が第一回監督作品としてメガホンを取り、佐野周二と田中絹代が共演した。

「シナリオは相当技巧を用いた。話そのものは低調だが、あとは川島君の腕一つ」と別の杉山氏宛葉書に織田は、杉山氏が送った「巴里祭」のシナリオが参考になったとも書いている。ロケハン中に検束されたり、フィルムも足りない困難な条件下で「還ってきた男」に解題され封切られた。「映画界をあつといわせるつもりだったが、いたずらに客を何となくたのしませただけで終わりった」と織田は書いたが、とにかく日本軽佻派の誕生を示

していた。翌二十年三月八日、川島は織田に手紙を書いて「われ等青年の時代」が来る。戦争が終わったら前人戦後「表現派が起こったように」軽佻派を立上げようとジンメルの言葉も引用した。

日本軽佻派とは何か？ それを考えるうちに私はもう一つ幻のシナリオ「わが町」の存在に気づいた。前述の松竹の企画で、巨匠・溝口健二が織田をシゴキ抜いて書かせたあげくボツにして「もうコリゴリ」と周囲に織田がもらしたという話を聞いて探した。松竹京都撮影所の関係者など当時を知る人々はほとんどおらず途方に暮れていた。杉山氏から「新藤兼人さんの『愛妻物語』の中にインサートされたカットに「わが町」というシナリオのタイトルが見えるとお聞きし、新藤さんに問い合わせようかとも思った。

彼も又、溝口の下で織田と机を並べて（？）シナリオ修行に励んでいたはずだから。

果たしてシナリオは「灯台下暗し 大阪府

立図書館の織田文庫で見つかった。おびただしい草稿の束の中で「社団法人 映画配給社 南方局宣伝課」の原稿用紙に独特の字で書かれたそれは紛れもなく小説ではなく、シナリオであった。

通天閣。

まだハミガキの広告文字のなかった頃の通天閣を背景に、次の字幕。

明治四十五年 大阪

マニラ帰りらしい白い麻の上衣を来て、信玄袋を下げている他吉（三十六才）が、通天閣を見上げている。他吉、通行人を呼びとめて、

他吉「あれ、いつできましたんや。」

通行人「此間（こないだ）できたホヤホヤや。」

以上のファーストシーンは、昭和十八年の小説「わが町」にはなく、形式もシナリオそのものであり、執筆はその前年十七年だと推測される。（その証拠に同年刊行の『西鶴新

論』の表紙タイトルの手習いが原稿にはさまっている）また後記の原稿をみると、溝口、依田（義賢）、新藤…等への謝辞がペンで消されているのも興味深い。

溝口の後で川島と出会い、日本軽佻派の名乗りを上げようとしたオダサクは真正の映画人であった。晩年の『可能性の文学』は、厳しいシナリオ修業の渦中でつかんだ映画的思想の帰結でもある。

井村身恒氏はオダサク映画祭実行委員長で
大阪府立堺東高等学校教諭です。